

所 陵

No. 5

関西大学考古学等資料室集報

昭和57年 5 月31日発行



銅鐸（大阪府寝屋川市出土）

目 次

関西大学博物館（仮称）設立について……………	2
インドの博物館……………	3
金石文拓本について……………	4
エジプトの護符……………	6
近世文書解読について……………	7
美術館の展示のことなど・雑感……………	8
河内国府遺跡の庄内型甕……………	9
三尊仏による堂内荘嚴……………	10
資料室資料紹介……………	11
編集後記……………	12

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06—388—1121)

関西大学博物館(仮称)設立について

横田 健一

- A いよいよ第一大グラウンドの南半分をつかって大きな総合図書館が建てられるんだってね。
- B うん、今までの旧図書館の書庫が、八十万冊の本で満杯になったそうだからね。新図書館は百五十万冊の本をいれる書庫ができるんだそう。もっとも、毎年四万冊ずつ本が増加しているから、三十年もたてば、また満杯になるのだろうか。
- A それで、新図書館が完成したら、旧図書館は、どうなるのだ。昭和三年の建築といったって、しっかりした頑丈な建築だしね。前の方の円形部分の事務棟は戦後、村野藤吾氏の設計で、これも四半世紀前のものだが、名設計との評判が、建築学界では高いね。
- B 見かけは美しいが、館の職員たちは使いにくいと、こぼしている。これも事務室が移動すると、閲覧室とともに空き家になる。それで、跡地利用希望者は申し出よと、本部の方から、いつてきている。
- A それで利用希望者はあるのかね。
- B そこでだ、考古学資料室の方もだね。大学院四階の仮り住いで、手狭なのでね、跡地利用の希望を申し出ているのだが。
- A 今の大学院四階は、そんなに手狭かね、陳列は、国学院大学の資料室などくらべると、ゆったりしているようだがね。
- B いや、本山考古室旧藏品だけでも一万一千余点あってね。主もな、見るべきものでさえ、半分しか陳列できない状態だ。その上、つぎつぎ調査・発掘して来た出土品も数千点あるだろう。だから、もっと広い面積を持つ陳列室が欲しい。
- A それは、そうだね。それに南側の収蔵庫も一杯となって来てね。学生諸君の整理や復元、実測、撮影などの作業室と、もう少しスペースが欲しいし、西側の書庫もほぼ一杯になったね。
- B だから図書館跡のスペースが利用できると、現在の三倍以上、利用が可能になると期待している。
- A しかし、今の大学院四階は、明るいし、外の展望というか、景観はすばらしいね。ここを去るのは、ちょっと惜しいね。
- B うん、考古学専攻の学生たちも、そういつている。愛着は、そうとう強く深いよ。
- A でも、図書館の方も、末永先生が昭和二十五年に関大に赴任され、翌年の図書館の三階南側



図書館本館

- に研究室を開かれて、思い出の深い場所だね。
- B そうなんだ。初期の古い卒業生たちには実になつかしい室だね、あの室からの見晴らしは、よかったね。もっとも「末永先生が、ちょっとこわかった」と学生たちは、いつていたが。
- A でも、先生には、やさしい面もあったよ。ときどき、お八つの菓子なんか振舞われてね。昔話、若い時の思い出ばなしなんか面白いんだ。
- B 京大考古学研究室の浜田青陵先生をはじめ、その研究室員たちのこと、本山考古室のこと。宮滝や石舞台の発掘、唐古や橿原の調査。
- A そのような先生の雑談の中で、学生たちは教育されたね。
- B 研究室で、土器や石器の実測や復元、整理、調査報告書の読書、拓本とり……そういうことも、むろん、よい勉強だが、雑談の間に学問の仕方、調査の時に必要な対人関係の礼儀作法、まあ、なんとというか、研究のコツを覚えたわけだね。
- A そう、それなんだ。博物館は、むろん物を精細に観察する場所だ。実測や拓本とり等は観察を精密にさせる方法だ。しかし雑談というより、物を見ながら、学問的な対話をする、それが大切だね。
- B それなんだ、僕がオクスフォード大学に留学した時、よくピット・リーヴァーズ民族学博物館やアッシュモリアン美術館で、本日の講義があるというような掲示が出ていた。実物の前で、先生と学生たちが、研究的な討論をすること、これが大学博物館の生きた使用の仕方だね。
- A 図書館跡のスペースが本部から我々に与えられることを期待して、ひと先づ対話を終ろう。

インドの博物館

網干善教

インダス・ガンジス河両流域のインド亜大陸は世界四大文明の発祥地の一つである。ここはまたバラモン、ヒンズー、仏教などの宗教文化の中心地でもあった。それだけにインドにはすぐれた宗教遺跡や遺物がのこっている。特にイギリスの植民地であった時代から近代的な発掘調査がすすみ、出土した遺物は各地の博物館に収蔵、展示されている。今回は特にインド国立博物館のカルカッタ、仏教の聖地サルナートにある考古博物館、マツラ仏の発祥地にある公立博物館マツラ、そしてニューデリーにある国立博物館ニューデリーを中心に見学した。

インド国立博物館カルカッタ (National Museum, Calcutta) 西ベンガル州の政治の中心の町であり、人口700万人を越す最大の都市であって、市街地の中央を流れるフーグリ河左岸、政治・文化の中心地帯の一画、チョーリンキロードに面している。建物は1875年に建造されたもので、インド文化史に関する遺物が展示されている。なかでもモヘンジョダロやハラッパなどの先史遺跡の出土品もさることながら仏教やヒンズー教などの宗教的遺物の展示が多い。特に正面のロビーに展示されたアショカ王の石柱、伝カピラ城跡から出土した舍利容櫃あるいはバルトストーパを移転した壮大な展示物などがみられる。

サルナート考古博物館 (Archaeological Museum, Sarnath) サルナートは鹿野苑という名でも知られる初転法輪の地で、四大仏跡の一つに挙げられる。遺跡は有名なデーメク塔を中心に奉献塔や寺院跡が発掘され、復原保存されているが、その遺跡公園ともいふべき場所に考古博物館がある。ここにもマツラ系の仏像が多く陳列されているが、何といてもメインホールに展示された四頭の獅子を彫刻したアショカ王石柱と初転法輪の釈迦座像はすばらしい。

博物館の建物は1910年に建設されたものであるが、至宝といわれるものは紀元前3世紀の製作と



サルナート考古博物館

されるオリジナルな、“Lion-capital of Ashoka”と称される獅子像である。これはインドの象徴とされ、紙幣の紋章にもなっている。高さ2.31m、マウリア朝に造顕されたものである。またメインホールの右側に展示されている初転法輪の如来像は5世紀、グプタ朝の代表的な彫刻であり、インド仏教芸術の優秀さを知ることができる仏像である。

公立博物館マツラ (Government Museum, Mathura) インドの首都ニューデリーとその南方の有名なタジマハールのあるアグラのほぼ中間にマツラという町がある。ここはガンダーラ仏に対するマツラ仏の発祥地として知られる博物館の陳列品は量的にも質的にもすぐれている。かつてこの博物館を訪れたときはあいにく休館日にあたり、旅行日程の都合もあって見学することができなかった。そこで今回は再度この博物館を訪れることにした。博物館はダンピイ公園にあって、1874年に開設されたものである。館内には極めて多数の仏教、ヒンズー教の仏像や神像が展示されている。なかでもインド仏教彫刻の最高の傑作といわれる3軀の如来立像がある。特に434年ADに相当する銘のある立像はグプタ朝朝芸術を代表するものである。一軀一軀を丹念に見学すれば終日を要するであろう。

インド国立博物館ニューデリー (National Museum, New Delhi) この博物館はいわばインド国立博物館の中心をなすものである。以前にもここを訪れ、感激したことがある。

今回は特にスタインが将来したトルファン出土品を中心に見学した。『新疆出土文物』という学術的価値の高い図録があるが、これに掲載されている文物は新疆ウイグル自治区博物館にも北京の歴史博物館にもなかった。実はその資料はこの博物館で所蔵されていることを知った。



アショカ王塔柱の獅子像
(サルナート考古博物館)



434 AD造顕の如来立像
(マツラ博物館)

金石文拓本について

角 田 芳 昭

本学所蔵の金石文拓本資料は日本・中国・韓国等2000余点である。

本資料は旧本山コレクション（元毎日新聞社長本山彦一氏蒐集集）の一部であり、数年前より文学部壺井義正名誉教授に依頼し整理していただいていたが、このほど全資料の一応の整理が完了したので紹介してみたい。

学問の領域に金石学というものがある。あるいは金石文学ともいう。金属や石類、埴、つまり紙以外の材料にきざまれた文字を研究する学問であり、文献学と考古学との中間にあって、どちらにも欠くことのできない補助科学である。金石文の価値は大きくわけて2つある。1つは銘文の内容が歴史的事実を知るための根本資料となることである。造像記の銘文、あるいは墓誌の銘文と、正史の記述を比較して、歴史上の誤まりを訂正し、新しい事実を証する資料ともなるし、とくに文献のとばしい古代文化研究において、その価値は高く評価されるものである。

他の一面は、銘文がそのまま美術的遺品となることである。文字の字体が時代によって異なっており、書体および書風の変遷があり、書道芸術等の発展の研究には欠かせない資料である。その他当時の庶民生活や、社会相、信仰史等の探究にもこれらの資料により解明されることもある。この欠くことのできない金石文の拓本が所蔵されており、利用次第では新たな研究資料ともなり得る。現に都市といわず農村部といわず日進月歩のめまぐるしきで変貌し、こうした文化遺産がどしどし失われていくとき、残存している拓本類は貴重な資料といえる。これらの資料は大正初年より中頃に拓本されたもので、著名な「大日本金石史」を著した木崎愛吉翁よりゆずられたものといわれ、「大日本金石史」著作参考資料と思われる。

日本の部の拓本資料として次のような資料を所蔵する。

1	碑石類	158点
2	墓碑銘類	108点
3	墓碑類	91点
4	石塔姿類	144点
5	石仏造像銘類	102点
6	灯籠類	97点
7	鐘類	210点
8	金口擬宝珠金具類	64点
9	鏡類	202点
10	銅鉄諸器類	42点

以上1200余点である。

中国の部としては「龍門石窟」の石刻造像記銘文拓本が大部分をしめており、「古陽洞」「火焼洞」など13洞のもの約750点を所蔵する（資料点数内訳については本彙報第2号12ページ参照）、その他武氏祠の石室画像石拓本26点を所蔵する。

韓国墓誌拓本として、高麗仁宗明宗時代の朴僕射氏、純滅氏、金振鐸氏、金朴瑞氏、朝散大夫、李朝正宗時代の学生金公氏のものが存する。これらは調査の結果、当時の墓誌の現物が所蔵されていることが判明した。

さて、ここで古来よりの著名な資料をみることにする。日本三古碑といわれる「下野那須国造碑」「上野多胡郡弁官符碑」「陸前多賀城碑」の拓本より始まり、「宇治橋断碑」「益田池碑」等所蔵する。墓碑は墳墓の外に建てられるものを指し、『凡墓皆立碑記具官姓名之墓』（喪葬令）とある。書紀には『碑日春秋五十有六而薨』と記した墓碑の存立を伝えていたが現存しない。

近世の京都・大阪の墓碑銘拓本で著名なものは所蔵されている。元禄の3大文人「芭蕉」「西鶴」「近松」の墓碑銘、「伊藤仁斎」「東涯」「篠崎小竹」等

はじめ浪速の著名漢学者の拓本があり、『大阪金石史』(木崎愛吉著・大正11年)のものはほとんど所蔵している。また「大雅堂」「呉春」「華山」の画家のものや、「大塩平八郎」「林子平」のものも所蔵する。

墓誌は埋葬した墳墓内に埋められた青銅板、鉄板、磚などに官位、名字、卒年などを記したものであり、厳密には墓碑と区別すべきである。墓誌拓本は「船氏王後墓誌銅板」[天智7年(668)]のものより、「小野毛人墓誌」「文禰麻呂墓誌」「威名大村墓誌」「下野園勝母夫人墓誌」「伊福吉部徳足比売墓誌」「小治田安万侶墓誌」「石川年足墓誌」「高屋枚人墓誌磚」「楊貴氏墓誌」「紀吉継墓誌磚」と日本古代墓誌銘文拓本がそろっている。これら墓誌の被葬者が当時の社会上の重要な地位にあり、当時の知識階級人であったので、その誌された銘文は、史書を補生するものとして、また、異国文化がどのような形で受容されたかなど、その一端を知る資料として意義がある。

その他まとまった資料として「梵鐘類」の拓本約220点があり、古来より研究されている著名な

鐘類はほぼそろっている。この資料については、本学史学会『史泉』第53号(昭和54年3月)に掲載している。「鏡類」の拓本約200余点は平安時代より江戸時代に至る和鏡であり、年号不明のものが多く、今後より詳細な整理研究が必要である。

昭和54年1月20日「太安萬侶」の墓誌が発見され、世上をにぎわせた。そして墓誌に関する研究が飛躍的に発展した。「史書」における信憑性を著しく高め、銘文における年月日をめぐって「暦」の研究が活発となり、あるいは中国の墓誌との関連においても研究されるようになった。また火葬の始源との関連、須恵蔵骨器などについても論及されるようになった。一片の墓誌の発見は、関連する諸科学を飛躍的に向上発展させた。墓誌そのものにおいても、形態、被葬者、銘文と書風、そして社会的な存在意義が研究されていったのである。

本学の金石文拓本も教育・研究の一助としていただければ幸いである。一応の整理の完了を見たのでここに紹介する次第である。

なおこれらの資料目録を、今後紀要類など学術誌に発表していきたいと考えている。



船氏王後墓誌



小治田安万侶墓誌及副板



高屋枚人墓誌

エジプトの護符

加 藤 一 朗

科学万能の時代に生きるわれわれの間でも、護符（お守り、英語ではamulet）の御利益を期待する場合が少なくない。バスの運転手席の前には、「成田山」のお札が見られ、受験生たちはポケットに天神様のお守りをしのぼせ、家いへの台所には「火の用心」のお札が貼られている。科学以前の世界に住み、運命はすべて神がみの思召しのまま、病気その他の災害は悪鬼たちのしわざ、と信じきっていた古代エジプト人が護符の絶大な愛好者であったとしても少しも不思議はない。エジプト語で護符にあたる語は「サ」で、それは本来「保護」、とりわけ「魔よけ」をいみした。そしてわが国の護符がおもに紙製であるのに対して、エジプトの護符の素材は石英・長石・ザクロ石・トルコ玉・メノウ・黒曜石・コハク・クジャク石・花崗岩・蛇紋岩・斑岩などの岩石や貴石、金・銀・銅・青銅などの金属、木・ガラス・陶土・アマ布と多種多様で、形・大きさや性格も様々であった。

陳列されている例（写真）は3個とも陶製（げんみつにいうとエジプト特有のファイヤンス焼き）の小さなものである。写真のAは椅子に腰かけているヒビである。ヒビは朱鷺とともにトト神の化身であった。この神の属性は月・文字の創造者・時刻の測定者・暦の作者・神がみの書記などと多岐にわたるが、一口にいえば知恵の神であって、このヒビの護符は学生たち（書記の卵たち）によって広く愛好されたにちがいない。Bはジェドとよばれる柱のひながたで、この柱は本来下エジプトのある神の印であったが、早くにオシリス神、（戸陵No.4の「オシリス神小像」の項参照）の神格の中にとり入れられ、この神の霊を宿すものとされた。この護符の効用は、ジェドという語の本来いみするところ、すなわち「堅固・安定・保存」などの力であった。Cは見られる通り猫である。これは雌猫で、女神バスト（またはバステト）の化身であった。この女神の属性は生殖力・精力・機敏さなどで、後代には万物をはぐくむ太陽の優しい面をもあわせそなえるようになった。いずれにしてもこの護符はとくに女性たちの間で愛用されたのではあるまいか。以上の3護符はともに背部に小孔があいており、人びとはここに紐を通し、装



エジプトの護符

A (3.4cm) B (3.1cm) C (3 cm)

身具のように日常身につけていたのであろう。しかし一般に護符は来世における安寧のためにも用いられたのであって、しばしば多くの護符が、ミイラに巻きつけられた包帯の間から発見されている。

A・B・Cの他に、どのような護符があって、どのような効力を発揮していたのであろう。枕（ウェレス）の護符は死者の復活を促がし、蛙（ケレル）のそれは妊娠と分娩を護り、心臓（イブ）は思考の源泉、生命を表わす結び目（アंक）は生者と死者とに生命を与えるものであった。「オシリス神話」を背景としているホルス神（オシリスの息子のタカ神）の「完全な目（ウジャト）」は健康と幸福を約束するもので、今日エジプトの切手にも描かれている。ファラオ（王）の諸種の冠、王の化身であるハゲタカ女神やコブラ女神、また楕円形の王名棒（カルトゥーシュ）なども護符に用いられたのは、王が神であるというエジプト社会の特殊性を反映しているものといえよう。

エジプトの護符は日本のそれと異って、一般に文字は記されていない。しかし、以上に挙げた各護符の形は、そのまま象形文字の一字一字になってもいるのである。いいかえると、エジプト人が、きわめて具象的な象形文字の1つ1つについて感じていた神秘性がこれらの護符にのりうつしているともしえるのである。

なお陳列ケースには数個のスカラベ（聖甲虫型印章）も納められている。これらも護符の一種と考えて宜しいのであるが、底面に刻まれている模様や文字がそれぞれ意味をもつという特殊なもので、別の機会に紹介したい。

近世文書解説について

津田秀夫

考古学資料室からこの度“近世文書解説について”の標題で原稿の依頼を受けた。察するに、近世文書の読み方についての手引とそれに対して心掛けるべき注意事項を述べることを期待していると思われる。もっとも近世文書というのが、古文書の分野でとくに注目されるようになったのは、第二次世界大戦以降のことである。近世以来の旧家の社会的地位に大きな変動が起こり、それに伴って近世文書の散佚・防止が激しくなり、これをひき止めるのに、その防止のために、保存運動が起ってきたことに関係がある。

しかし、これを近世史研究に役立せるのに大きな刺激となったのは、地方史の編纂事業であろう。地方史を明らかにするには、地域的な個性的な記述を可能とするような具体的な史料の存在が大きな意味を持つ。このために戦後の近世文書散佚防止運動や保存運動の役割は大きい。その成果として近世文書や記録類を利用した近世史の研究の飛躍的な発達は見落すことができない。

ここで注意しなければならないのは、古代や中世の古文書類と近世書類とは可成異なった処がある点である。古代・中世の文書というのは、未発見のものを含めて近世文書に較べればその数は少く、また、何回かの文書整理を経由して今日に伝わっているものである。このために古文書学として、その様式や形式を基礎に分類する学問として発達した。しかも、権力史的視点から、公式様・公家様・武家用などと分類されてもみた。これは古代・中世の政治史の展開を理解するには好都合の分類でもあった。

しかし、近世文書群は膨大な数量であり、必ずしも政治史的見地からの整理を経ていない文書も多量に現存しているのである。このために近世文書を古文書学風に体系化することはまだ出来ない。ことに近世文書や記録類を対象としての社会経済史の方面の研究の盛行と関連して、その側面からの考



文書を調査する学生

慮もなされなければならないであろう。

このために考案されてきた実務的な分類としては、家別、あるいは地域別の方法がとられている。これは近世社会における史料所蔵者が特定の身分階層の家に伝承されており、行政文書と家の文書の公私の区別が必ずしも明瞭でない処から生じた結果である。解説にあたって注意すべき点として、たとえば、これらの文書には作成された事情を明らかにするような関連文書が存在し、それらを合せて一件書類として袋に入れられたり、一括して紙紐で束ねられたりしていることが多い。しかるに、これを様式や形式や時代別に整理・分類してしまつては、文書群間の関連性が見失われ、近世文書としての持つ意味内容の大部分が失われることがある。したがって、未整理文書を整理するに当たって、一件文書の関連性を見失なうことのないようにすることが大切であるが、これも家別、地域別の文書の分け方にはその惧れを防ぐ意義がある。

近世文書の解説にはただ単に字づらを追うだけでは、歴史的意味を汲み上げることができないのである。このことを十分承知した上で近世文書を取り扱い、その解説を試みるべきであろう。

もっとも初心者が近世文書に親しむためには、まづ読めることが大切であることは当然である。もちろん、近世文書の読み方に関する本も何種類か出版されている。これらによって、文字を覚えるというのも一つの方法であろう。しかし、実際には時間をかけた割には、あまり効果があがってはいない。むしろ、近世文書の解説の効果をあげるためにも、それだけを切りはなして行なうのではなく、近世文書の整理を行ないながら、解説の力をつけて行くことが重要である。要するに、先達や同学の人たちのなかで数多くの文書に接し、学ぶことが大切である。このために第一はまず文書になれることを奨めたい。そうすれば、多種多様な文書に接することができる。出来ることなら最初から古文書を原稿に写し取ることを手がけるべきである。なるほど読めない箇所が多いであろう。しかしながら、読めない箇所は原型のままで写し取るようにしていくようにするとよい。度重なって古文書に接しているうちに、機会を改めて繰り返して読んでみると案外に読めるものである。要するに、百の説法より慣れることである。文書を手にとって親しんでみることである。また、機会を求めて調査に参加したりして、実地に文書にあたってみることである。

美術館の展示のことなど・雑感

西村 規矩夫

かつて古都プラハを訪れた時のこと。美術館の見学に疲れた私は、ある日の午後、国立博物館の中を散歩することを思い立った。私はただ気持ちよらしに入っただけだったのだが、その広大な鉱物標本室を巡っていた時、今でもなお思い出すことのできる充実した感動を体験することができた。鉱物の名称をいちいち思い出すことは出来ないが、金、緑、紅色などさまざまな色彩の結晶を次々と眺めていくうちに、私は造化の妙の世界に恍惚として引き込まれていったのである。そして観覧し終えて出口に達した時、私はいつもの美術館で観察を行う時とは著しく違って、殆んど疲労を感じていない自分に気付いて驚いた。

いったいこれはどうしたことだろうか。私の鉱物標本の見方は科学的というよりもむしろ自然美の多様な現象を享受する審美的な見方だったと言える。そこに展開されていたのは、人為的創造物である美術や技術の作品とは異なり、いわば神唯一人の創造の意志によって貫かれた世界であり、私たちはその意図や理念を推し測ることもできず、ただあるがままに受入れ讃嘆することしか許されない世界であった。美術史研究者というものは、絵画や彫刻がたとえ美術館というニュートラルな空間の中に展示されているにしても、それらがかって、誰によって、何時、如何なる意図で制作され、如何なる場所に設置されていたのかを思い浮べようと努める。哲学者のニコライ・ハルトマンの言う通り、芸術作品はそれに対して適切な態度をもって向い合う観照者にのみその深層の表現内容を現象させるものであるが、こうした態度をもつことは必ずしも自明のことではない。少なくとも、自分の限定された世界観に伴う先入主の排除が行われて、初めて異った世界への透視も生じて来ようというものである。ということはまた、同一壁面に並んでいる絵画にしても、時代や民族や作者が違うごとに、いわばスイッチを切り替えながら見ていかなくてはならないであろうことを意味する。これはやはり疲れることなのである。

具体的な例で語ろう。プラハ国立画廊所蔵の2つの名作、デューラーの「薔薇冠祭」とブリュッゲルの「干草作り」は、いずれも16世紀の絵で

あって、私たちにとってさほど鑑賞し難い絵ではないにしても、前者は元来ヴェネツィアの教会堂の中にあった祭壇画であり、後者はアントワープの豪商の邸宅の広間を飾る世俗的な主題の連作中の一点だった。それらがもともとその中にあって呼吸していた精神的・文化的雰囲気、いわばそれらの「故郷」の状況は著しく異っているのに、美術館の壁面では、ただ額絵として同じように展示されているだけである。美術館では、ただ美術として純粋に鑑賞すればよいだろうと考える向きもあるであろうが、古画は近代美術のように純粋に美的・自律的な鑑賞画ではないのである。

先日、国際美術館で開催中の東山魁夷展を訪れたが、その4階には唐招提寺の障壁画連作を展示するために、御影堂の建物の実物大模型がしつらえられていた。勿論、本来の建築内部のもつ宗教的雰囲気は美術館の中では獲得されうべくもないが、やはり建築装飾である作品はその建築的枠組と共に鑑賞されるべきものである。とはいえこのような親切的な展示は、スペースや経費の関係もあって、何時でも可能であるわけではなく、美術館の展示がしばしば非情であるとしても致し方ないことと言うべきであろう。

しかしこれとは別問題に、鉱物標本の場合とは違って、美術作品には誤った展示ということが生じる。一般的に言うと、適正な視点の想定、周辺の空間の取り方、照明などのさまざまな問題が係っているのであるが、ここではかつて私が体験したヘンリー・ムア展の展示についての失敗談のみを記しておこう。「盾をもつ戦士」という像があって、これを展示担当者は会場入口の装飾を兼ねる意味合いで会場入口の側壁のすぐ前に配置した。しかしムアの彫刻は周辺のさまざまな視点から鑑賞されることのできる豊かな表現特性を具えているのであって、このような展示は作品の本性にそぐわない。それに気付いていながら、移動させる作業を果せないでいるうちに、ムアの令嬢が訪れて来られて、直ちにその展示を修正して欲しいと要求されたのには、恐縮した次第であった。作品の展示に当っては、無情に振舞ってはならないのである。

河内国府遺跡の庄内型甕

考古学等資料室所蔵の国府遺跡出土資料には、旧石器時代から歴史時代の各種遺物があるが、その中心は弥生土器である。これらは現在資料整理中であるが、その中に、弥生時代後期から古墳時代前期への移行期に位置付けられる、所謂庄内式土器群が認められる。庄内式土器群は、甕・壺・高杯・鉢などの各器種、他地域から搬入された土器で構成されるが、今回は明確に識別される庄内式甕形土器〔庄内型甕〕の一部を紹介したい。

国府遺跡の庄内型甕には角閃石を多量に含み、茶褐色系の色調を呈する生駒山西麓の特定された胎土を使用するもの（庄内河内型甕）と、在地の他器種と変らない赤褐色系の色調を呈する胎土を使用するもの（庄内河内在地型甕）とがある。他に共存するものとして、弥生後期以来のタタキを施す甕の属性を保持するもの（弥生後期型甕）もあるが、当時の発掘状況より、その抽出は困難である。また、弥生後期型甕約 600 個体に対して庄内型甕は 19 個体（約 3%）であり、庄内河内型甕と

庄内河内在地型甕とは、それぞれ 7 個体（37%）、12 個体（63%）である。

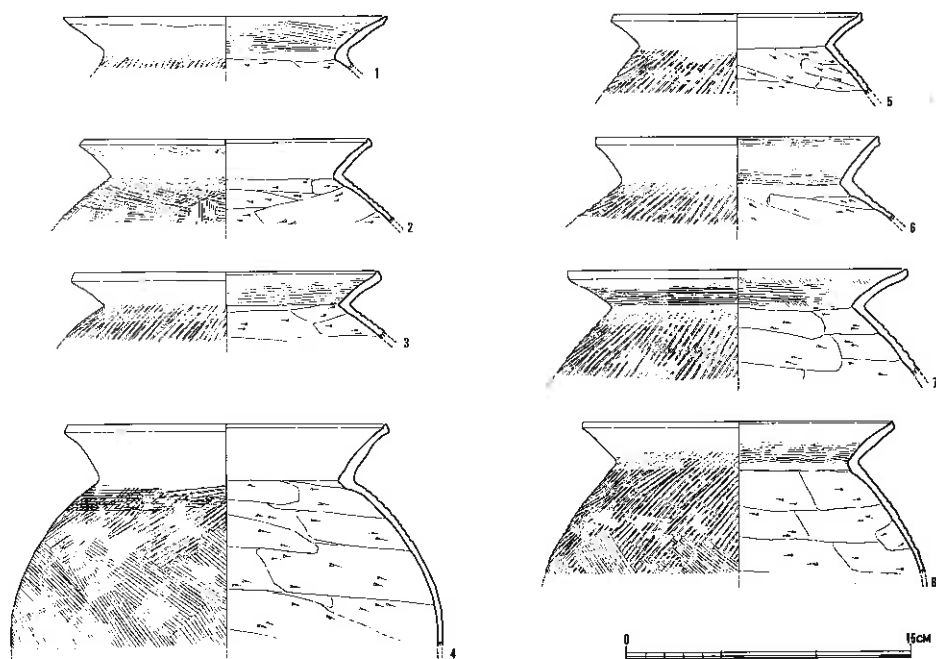
1～3 は庄内河内型甕、4～8 は庄内河内在地型甕である。いずれも口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は上方につまみ上げ、口縁叩き出し手法が看取されるものが多い。また、口縁部内外面、特に内面にハケを施す手法は一般的である。体部外面はタタキ、ハケを、内面はヘラ削りを施す。

2 はタタキの方向が庄内大和型甕の特徴の一つである左上りであり、手法的関連性が注目される。

3・4・6 には「大正七年四月 河内国府」の墨書があり、1918 年、大串菊太郎、本山彦一、田沢金吾氏らによって調査されたものと判明する。

以上のように、北・中河内と南河内の接点に位置する国府遺跡では、庄内式期の甕形土器として、庄内河内型甕、庄内河内在地型甕、弥生後期型甕が共存するが、その数量は微量である。これらの詳細は、後日刊行される報告書にゆずりたい。

（米田文孝）



河内国府遺跡出土の庄内型甕実測図

三尊仏による堂内荘厳

明日（昭和57年4月28日）から約1ヶ月間にわたって奈良国立博物館で“仏教工芸の美”——堂内荘嚴の粋をあつめて——をテーマに特別展が開催されることになっている。この展覧会には私たちが昭和49年に奈良県明日香村の川原寺裏山遺跡で発掘調査した三尊埴仏の一部も出陳してある。

仏教のみならず、キリスト教の教会やイスラム教のモスクなどでも目をみはるよう美しく、しかも荘嚴に堂内が飾られ、礼拝者にとっては嚴肅な感を与えるものである。

ところで仏教寺院の荘嚴には天蓋、幢幡をはじめ多種多様な法具が用いられるが、堂内壁面に壁画を描くことは著名な例としてインドのアジャンターをはじめ敦煌莫高窟、あるいは我が国の法隆寺壁画が知られている。

川原寺裏山遺跡で出土した三尊埴仏は、その形状、数量そして裏面の状態からみて、堂宇内の壁面に使用されていたものであり、一種の堂内荘嚴であることは先ず間違いない。

三尊埴仏の用途については以上のように考えることは可能であるが、中央に如来形を置き、その両側に菩薩立像を配する所謂一仏二菩薩の三尊形式は、それ自体が独立した図像である。それが壁面に多量に用いられることが果してどのような意味があるのだろうか。そして、そうした三尊仏によって堂内荘嚴の施されている顕著な事例があるのだろうかという疑問をもった。

そうした問題意識をもってインド、パキスタン、さらには中国の仏教遺跡を訪ねたなかで、多数の三尊仏を壁面に彫刻し、荘嚴としている例をインドのオーランガバード石窟寺院の第二窟にあることを知った。

オーランガバードはボンベイの東北約280km、デカン高原の西端に近いところにある町で、アジャンターやエローラ石窟寺院の調査や見学の拠点となる古い町である。

壁面を三尊仏で荘嚴した石窟のある場所はオーランガバードの北方郊外の地点にあり、丘陵の断崖面に開鑿された石窟寺院である。ただし、この石窟群はアジャンターやエローラ石窟群ほど大規模ではない。

さてこの第二窟は中央に主仏の釈迦像を祀る仏



方形三尊埴仏

龕があり、その周囲は遶道できるような構造になっている。この回廊状の壁面あるいは龕内の壁面には多くの三尊像が彫刻されているが、その図像は中心に結跏趺座の如来形のもの、川原寺裏山出土の埴仏と同じ倚座像の如来形の尊像を置き、両側に菩薩立像を置く様式もみられる。大きさは川原寺裏山遺跡出土の縦約22.5cm×横約17.5cmに近い小形のものもあれば約1mほどもあるような大形のものもある。しかしいずれにしても堂内を三尊仏で荘嚴していることになる。

堂内に三尊像を祀ることは中央に説法印の釈迦像、側面に諸菩薩等の図像を置く場合と、法隆寺金堂壁画で知られる如く、四方四仏を配し、四仏がそれぞれ三尊像である場合がある。したがって堂宇内の壁面に無雑作に多数の三尊仏を表現していることは、インドやパキスタン（ガンダーラ地方）にみられる奉獻塔のようなものに共通する意味をもったものであろうか。

オーランガバードの石窟にみられる壁面彫刻、川原寺の堂宇に荘嚴されていた埴仏、法隆寺金堂壁画のように絵画として描かれ、それぞれの手法は異なるが、川原寺裏山遺跡で推定した堂内荘嚴がインドにみられることは意義深い。（網干善教）



須恵器

須恵器の用語は従来「祝部土器」「齊瓮」「新羅焼」「行基焼」などとも呼ばれ、また朝鮮式土器、陶質土器ともいわれた。近年は「須恵器」が学術用語として使われている。

須恵器は「新羅焼」と名称がある如く、新

羅、百済よりの帰化人、渡来人達によって伝えられ、焼かれ始め、しだいに普及していったものと推定される。その時期は4世紀末と思われる。成形にロクロを用い登窯によって1000℃以上の還元状態で灰色ないしは灰黒色に焼き上げたかなり硬質の土器である。器形は壺、甕、盃、蓋杯、高杯、器台などに大別される。また、甕、横瓮、提瓶と呼ばれる珍しい型もある。本学にも島根県隠岐郡西郷町飯ノ山横穴出土品8点のほか、愛媛県温泉郡、和泉市、平城京出土などを含め、200余点を所蔵する。写真は台付長頸壺で高さ19.2cm、口縁径10.1cm、胴部径15.4cm、高台径19.2cmの均斉のとれた整形焼成の良い灰釉のかかった土器である。島根県飯ノ山横穴出土で、7世紀のものである。

資料紹介

信楽焼壺

日本の六古窯といわれるものに瀬戸、常滑、越前、信楽、丹波、備前がある。これらの窯業産地はともに中世の鎌倉時代に始まったものといわれている。

信楽焼の創始は聖武天皇天平14年(742)8月離宮を近江紫香楽に造り、盧遮那仏鑄造の詔がこの地で発せられ、瓦等が焼かれて「信楽窯業」がここに始まったのである。また、この地方に帰化人の石碑が残っているところより、宮の造営に関して、瓦、須恵器(新羅焼)が焼かれたとも推定される。ついで古信楽へと受け継げるのは平安末期といわれている。中世に至り農業が著しく発達し、種子貯蔵の必要から、保存容器種壺の需要が高まり、商業取引の発達より、信楽の壺は全国に販売されるに至った。桃山期茶の湯の流行より信楽焼の素朴さが愛用され、茶器、茶壺の需要など増大した。本資料室においても室町時代より近世に至る信楽焼の壺20数点を所蔵している。写真は室町時代のものであり、素朴で枯淡な味のある作品である。



唐式鏡

これは「草花飛禽文八稜鏡」である。中国の六朝以前の鏡式によって造られたいわゆる漢式鏡にたいして、新たに唐の鏡式にしたがって製作され、奈良時代を中心にそれ以降に流行し、平安前期までの銅鏡を唐式鏡という。これには、唐からの舶載鏡のほか、その踏返し品、および唐の様式をわが国で模して意匠化した仿製鏡がある。唐鏡は円形、方形のほか、八稜形、八花形があり、文様には大別して鳥文、獣文、植物文がある。

この「草花飛禽文八稜鏡」は内区に4羽の雀と4個の植物文を配し、外区には4羽の蝶と植物文を配している。八稜鏡は唐式鏡の中でも最も複雑、華麗な形式が多いといわれて

いるが、これは比較的温和、平明な日本の情趣がある。このことから、唐式鏡の末期のものと思われ、和鏡へと鏡式が変化する過程の中間的形式といえるものと推定され、貴重な資料である。

その他本学には和鏡6面を所蔵する。



資料紹介

土符

室町時代の土製の伝符の一種であり、長方形。縦約7センチ、横5センチ、厚さ1.5センチ、形は不整形である。粘土を焼き、釉薬を用いず色は多くは赭色、黝色のものであり、古伊賀の焼色に良く似る。上部に1つないし2つの穴をあけ、紐を通し携帯に便ならしめたと思われる。表面に人、米、馬、銭の文字や花押があり、裏面に年月日が陰刻されている。

出土場所は上野市西北部、旧野間村、東村、長田村、浅宇田村の地域に限定されている。現在発見されているものの中では、応永31年(1424)10月のものを最古とし、天正4年(1576)10月に至る。出土場所、年代が限定されているため、伊賀西北部に勢力をもった守護大名仁木氏が、秋の収穫期に貢米を徴し、あわせて人馬を徴発するために発行したものであると考えられている。

(日本歴史大辞典)
本学のもは永享(1429～)年間の銘ある資料と、天文10年(1541)の銘のあるもので、米、馬などの文字が刻されている。



◆資料貸出状況

57.4	鉢形土器	1点	石製丸玉	1点
	高杯形土器	1点	玦状耳飾	6点
	籠形土器	1点	銅 鏃	5点

(以上 国府遺跡出土資料)

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館「日本考古学の歩み—浜田青陵と大和の遺跡—」展へ

◆閲覧人員

年度	51	52	53	54	55	56
人数	307	300	243	372	597	404

◆購入資料



黒漆瑠璃螺鈿箱

資料室では56年度に、北村昭斉作「黒漆瑠璃螺鈿箱」を購入した。この資料は博物館実習教材にも使用したいと考えていたので、本学講師高橋隆博氏（奈良県立美術館）を通じて、特にお願いして製作していただいた。以下高橋氏に解説をお願いした。

『作家の北村氏の方でも、こちらの意を十分にくんで、素地（曲輪造り）から、文様・素材・技法にいたるまで、実にさまざまな工夫をこらして製作して下さいました。だから、この作品を見れば、とくに奈良・平安時代の代表的技法である、蒔絵・螺鈿・瑠璃・平文等の漆芸技法がたちどころに理解できるようになっている。』

製作者の北村昭斉氏は、昭和13年、代々漆芸を家業とする北村大通氏の長男として奈良に生まれ、東京芸術大学漆工科に進んで、松田権六氏に師事した。昭和55年度の日本伝統工芸展では漆芸部門のトップとなり、東京都知事賞を受賞し、昨年12月には大阪高島屋ではじめての個展を開くなど、その活躍には目を見はるものがあり、気鋭の人である。』

編集後記

ここに第5号をお届けいたします。

本学に博物館学課程が昭和36年に開講され、20年を経過した。これを記念し、この戸陵の特集号として『博物館学課程創設20周年記念誌』が発刊された。序文は創設者の一人であられる末永雅雄先生にお願いし、励ましのお言葉をいただいた。20周年回顧は横田健一先生であり、あとがきは網干善教先生である。内容は考古学、歴史学、民俗学等の学術論文、資料紹介、博物館研究などであり、資料編として学生の博物館実習報告その他を入れ、総勢32名の執筆者となっている。(768ページ・

800部限定)これを機会に本学博物館学課程の一層の充実・発展を期待したい。

本彙報の執筆を横田・網干・加藤・津田・西村の諸先生にご無理をお願いした。その他大学院生米田文孝氏の国府遺跡の庄内型甕の紹介文をいただいた。ここに感謝申し上げる。表紙の銅鐸は大阪府寝屋川市四條畷出土のもので、総高31.5cm、四区画契捺文銅鐸である。昭和15年重要美術品認定資料にされた。鐸面はかなり摩滅しており、鐸には左右各3個の飾耳が付してある。機能については宝器説と祭器説があり、弥生時代後期の製作と推定される。

《角田 芳昭》